



書家 加藤裕さん作 『久遠』

真宗高田派
賢隆山久遠寺

〒460-0007
名古屋市中区新栄1-4-6
Tel 052-241-5231
fax 052-241-5231
Kenryuzan-kuonji@nifty.com

久遠寺住職の いま不思議なのを ちを生活している!



気象の変化が激しく、温度差も大きく、自然環境の変化に人間がついてゆけない日々であります。しかし私たちは人工の自然の中で暑さ寒さ、雨や風の音も感じられない生活を送っています。このように自然環境に反逆する中、この生活を快適と思ひ、自然の恵みに対して反省する事を忘れ、資源の限界をも知らず、ただ利害や打算の欲を追求した結果、世界中に大恐慌を招いている現状であります。リストラや失業などの雇用政策が軽んじられ、大企業の使い捨てや無駄使いの結果、人間の自分さえよければいいとの考えが、いまこそ愚かであったことに気付かねばならない時であります。野に生きる生物たちは、自然の変化にもめげず何も不平を言わないで、厳しい冬を越え春を待つて、自分自身を元気に精一杯主張しています。人間もこのように自然に準じて生き、心の貪欲さを抑制せねばならない時と思ひます。

四月は暗いニュースが多い中、明るい話題の一つとしてWBCの世界一がありました。例年プロ野球のペナントレースは、一年間で130、140試合の長丁場の試合をこなしています。勝ち負けの繰り返しで、最後にすべての面で勝ったチームがリーグ優勝、また日本一のチームとなります。しかし、このWBCは一試合一試合が真剣勝負であり、また国と国との誇りをかけての戦いであり、今まで見た事もない緊張の連続でありました。観戦する側が緊張するのですから、戦っている選手たちは考えられないほどのものすごい重圧の中で個々の技と団結力、また国の誇り

をもつて挑まれたことと思ひます。結果が全てであるが故に、理屈も通じず、弁解もできず、全神経を集中し、勝ちに向かうという、前進あるのみの戦いでありました。私たちも人生において前へも行けず、後ろへさがること出来なない岐路に立たされた時、今まで体験したことや、教えられたことが判断材料となつて来た結果を招いていると思ひます。最終的に結果はどう出るか分かりませんが、その結果が明日への実りと自信になつていくのではないかと思ひます。WBC終了後、イチロー選手は、新聞紙面で一人全責任を負つた如く、その重圧を語ってくれました。想像以上の苦しみだつた、痛覚では感じ得ない痛みまで経験した。途中まで山あり谷ありでしたが、自分には谷しかなかった。最後に山に登ることができてよかった。」と述べています。予選の初めから不振で責任を感じ、今までやつてきた信念が崩れそうになつたようです。その結果は問われることとなりますが、来るであろう結果を想像するとますます泥沼に落ちている思いがあつたようであります。しかし、そんな中で一つの決断が出たのは、今まで感じたことのない痛みを乗り越えられた故に人間として頂上ではないが谷を超えられたことと思ひます。

先にも述べましたように、後へも先にも戻れないけれども先に渡った方々が「建めよ」という体験した言葉で一つ一つの苦悩を越えていけると、仏法の教えの中で伝えられています。

久遠寺住職 高山元智 合掌



聖人親鸞

四月

南無阿弥陀仏を

とまじうれば

この世の利益

南無阿弥陀仏を称名念仏ともいいます。称は稱、述べる、称える、適うの意であります。名に適うのが「南無阿弥陀仏」で一つの名であり、単なる名詞であります。そこにもう一つ動詞の意味も伴います。それは「助けてやるぞ」「私に頼れよ」と喚びかけるはたらきとしての名であります。召は単に名にあらざると先輩が教えて下さいました。例えば、「内科」「外科」という名詞であります。そこには「内科」は「内」の中のこと、治してやるぞ」というはたらきがあり、また「外科」は「怪我、骨折などは治してやるぞ」とはたらきとしての意味を含んでいるのです。南無阿弥陀仏の名も、人間がその罪業性に目覚めたとき、誓いの言葉として我が身にはたらいてくるのでしよう。

仏の名を呼ぶ時、仏を拠所として生きようとするのが、私たちにとつて大きな恵みとなりはたらきかけてくるのでありましよう。

五月

仏法不思議

いふことは

弥陀の弘誓に

なづけたり

前にも寺報でお知らせしました、不可思議には五つありまして、その中の一に仏法不可思議があります。一般的に不可思議と申しますと、超能力、超常現象とかいわれるように自分では、理解できないわかないことを指します。しかし、仏法では人と比較してその能力を誇ることより、いまあたり前と思いがら忘れていくことの中に、ますます生きていることの不可思議とその命の尊さを感じることを意味します。例えるならば、平常手を合わせた事のない人間が葬儀の時に手を合わせる不可思議さは、今までの感性が悩みを通し、葬儀というご縁によつて教える場が与えられるということだと思います。それは、人間が変化していく姿であり、自分ではありえない不思議な姿であり、それは目には見えない自分の理智では考えられない、あたり前の世界が自分自身に開かれることでありましよう。

六月

ながく生死を

すてはてて

自然の浄土に

いたるなれ

生と死、一般的には生(せい)死(し)と分けて読みますが、仏法で生死(しじょう)とつづけて考えます。前者は「空」を喜び、楽しく充実した人生を過ごせるかそれも生きていく内であると考えますが、「死」は嫌い避けて生きようと思つていきます。また人間は病気を嫌い、老を嫌悪し、健康を願ひ、生のみ追求し、その欲望には限りがありません。幸せの尺度を他人と合わせている限り、苦しみは消えず、その果てに絶望感、孤独感が生じてしまいます。お釈迦様は生と死も同じように受け止めることができ、世界をお教え下さつています。お釈迦様がお説き下さつた生老病死を不幸と感受することの愚かさを示し、生まれた時から死ぬことは己に決まつていることでもあります。自分の思いの中でのみ生きていく「空」ではなく、それを自己の事実としてうける時、自分自身が見ている自然ではなく、自ずから決まつていることであり、自然の中に生かしめられていく自己に気付かせてもらつて、こがもつとも大切であります。そして、親鸞聖人は南無阿弥陀仏によつて迷いの身を知り、生死の苦悩を捨てしめて、自然の浄土に至る道を示して下さいます。

善き人の言葉を紹介させて頂きます。

我が身一人に目覚めさせる時

喜びも悲しみも ともに生きる

無数の友が見つかる

七月

信は願ひ

生ずれば

念仏成仏

自然なり

一般的に、信心があるとか信仰が篤いとかいうことは、人間の自意識であつて人間の考えから出るものでは決してありません。人間から願ひは欲であります。信心とは、仏が我々人間自身を救わずにはおれないと願われるところから与えられるものであります。仏は、本当の願ひを建てられ、その願ひに耳を傾けている自分に気付かさせて下さいます。このような懺悔、懺悔の自分を見つめる時、願われた者としての自覚は、願われた者を目指す自覚となり、やがて願う者として育てられていくのであります。自分の無力、無知なることに気付かせて全てを任せる心が、仏を拠所としていくことによつて、そこに当り前の世界に感謝と感動が初めて芽生えてくるのであります。

母を偲んで

七拾年もの間、皆様にお世話になりました久遠寺第十八世坊守の通夜葬儀ならびに護持護念のお心を厚く御礼申し上げます。戦災、復興、再建の際にはご同行各位にただならぬご協力を頂き、今日まで歩んで参りました。

四苦八苦の一つに、「愛別離苦」という苦が語られます。愛する人とは必ず別れ離れる定めがあり、その苦しみのことをいいます。今回の母の死去では、この苦しみを体験し、親子の絆を強く思い出させ、親子とは何であるかを問われました。そして、今生かされて生きていく歴史を改めて、見つめなおす機会を与えてくれました。我が親は、子供が立つ木になるまで傍で見守ってくれた親でありました。ですが、私自身は生きていく時は、自分の都合でしか見ていませんでした。自分の言うことを聞いてくれる時はいい親であり、優しい親でありました。逆に自分の言うことを聞いてくれない時は、冷たい親であつたと感じたことを覚えておきます。しかし、離れて初めて自分の思いでしか見ていなかったと気付かされ、苦しい時も悲しい時も親の名を呼ぶことによつて、すべての問題を解決してくれたことを思い出します。人間は困つたときに親を呼ぶ、そこに念じたもう親のころがあり、そのころが私をして名を呼ばせるのでしよう。親を念ずることによつて念ぜられていた私であつたと痛感致します。生前、いつも「すみません」「ありがと」と言っておりましたが、それが私たちに言つているように思つていました。母からの遺言であつたと思つてなりません。「すみません」はいろいろな人に迷惑をかけて生きていくことを忘れるなということ、「ありがと」はあることは難しいから今あるあたり前のことに感謝しなさいという意味で言われたと深く心に刻んでおります。

久遠寺住職 高山元智 合掌

吊辞

本日、法名 香華院釈莊嚴妙董法、俗名 高山京子 様の葬儀にあつた。追慕の念切なるものを覚えます。

京子坊守様は、大正八年十月八日、東区車道で誕生されました。幼くしては、そのご過ごされ、まもなく昭和区滝子に移住され、移住後には、男六人女一人兄弟の家におい、何不自由なく成長されました。琴や茶道、花など、励まれ、おどりとした性格であつたようでありました。商売をされていたお父様の希望で、商売のプラスマイナス、世界より、精神的に安穩なる寺へ嫁がせようと思われました。その夢が叶い、昭和十四年、先住職貞親上人と縁があり、ご結婚されました。後の昭和十六年、現在のご住職 元智様が誕生された時には、久遠寺先々代住職ご夫婦、京子坊守のご両親は大変喜ばれた事をお聞きしました。

しかしながら、その平なる日々を戦争によつて、本堂庫裡倉などの建造物が全てが破壊全焼してしまいました。全国一が地獄の底に落ち、人間の欲望の過ちを今さらながら反省せざるを得ません。生活も一変し、困窮から配給の家を与えられ、四人の子供とともに苦しい日々が続いて折、先住職貞親様が顔を焼夷で火傷をされることとございました。そのようなときに、家族を支え、食べるものもなくしても、境の空き地に麦や野菜を作り、夜遅くまで狭い土間で米に替えて頂くべく作業をしておられたと聞けりあります。また、嫁入りの着物やうたがり、着物七条袷袋に仕立てたり、仏具がなかだので、九世前卓にかける角掛にされたようであります。

その後、御同行各の願により、本堂を昭和二十九年に再建され、庫裏が昭和三十四年に完成致しました。戦争でばらばらになつて、檀信徒の皆様とも再び縁が結ばれ、念仏の道場として、その声が

聞こえるようになりました。これも全て御仏と同行様のお陰と常々言われて居りました。ようやく苦しい生活も落ち着き、聞法の間を求めて同行の三、四人の方々と遠くまで行かれました。その際には法話を録音するために、録音テープを持参し、その数は数本あるとお聞き致しました。先住職貞親上人は病弱で居られましたので、よく先住職の代わりにお月参りをし、ご法事まで行かれたようです。

聞法において、悲しみを逃れるものではなく、仏様の光に照らされて闇の中にいた自分が、いろいろな人々に出会い、今の自分の居場所が確認され、また信心によつて心が清められ、悲しみがなくなる事ではなく、真暗な闇の中にいた自分の本性が照らして出されることではなからうかと語つて居られました。私どもは苦難を超えられた方々には清々しく見えるのではなげしうか。

最近では、自宅療養中であり半年間続いたようでありました。その際にはいつも手を合わせ有難う、すみませんと仰つておられたと聞けりあります。その行為は京子坊守様が、自分を取り巻く多くの人の温かさ、み仏の智慧と、感動の気持ちの表れであつたように思われます。ご住職は、何もしてやれない自分なりにやり切れない気持ちでいばけず、と嘆けりおられました。

京子坊守様を初め、同年代を生きられた人々がどのようになつてこられたかを私達同信同行が後の者に伝えるべく事を約束し、また感謝致します。これからは、心の底に残つたお言葉を思い出し、確かめたい所存で御座います。長間、本堂にお疲れ様でした。

平成二十一年二月二十六日

久遠寺総代責任役員 竹口正男 合掌

長編連載 『更え合ひ』

昭和区 久遠寺檀家の一員さん

激動の昭和から繁栄の平成へとなるに従い、人々の思想も変換してきました。昔の連帯感から此の頃では自我が頭をもたげ、何事も、先ず自分本位に考慮するようになりました。あの世界大戦の時代は、陸軍大元帥陛下のため、お国のためと自分を犠牲にしてまで一致団結して撃ちて止まん勝つまでは...と頑張ってきたものでした。勿論自分が一番大切なことは、自分が認めることでしょう。しかしながら何事も周囲の同調があつてこそ気がよく進展して行くことでしょう。仰々それこそ人との支え合いの上に成り立つものです。若者男女夫々が本分を全うして成長していくのが好ましい事でしょう。子供は輝かしい未来があり夢があり勉強に励み、いじめ等の行動は慎み、大人は愛する家族のために、心根を傾注し奉寄り、門閥を数多く潜り抜けてきた丹熟な気心で如何なる時も温かく包容する事こそ肝要でしょう。殺傷事件や談合事件、そして贈収賄等々紙上を賑わせる反面、全く見返りを求めない乳児を抱く姿こそ純粹な愛であり、我が子の成長を夢見る永遠の姿でしょう。歌の文句ではありますせんが、孫を褒められりや、眠尻が下る微笑ましい情景も目に浮かびます。...次号に続く

久遠寺の宗派

久遠寺の宗派はどれ？

- ◎ 私たちの宗派はどれ？
 - 1 曹洞宗
 - 2 浄土真宗
 - 3 浄土宗
 - 4 天台宗
- ◎ 久遠寺の門派はどれ？
 - 1 本願寺派
 - 2 大谷派
 - 3 興正寺派
 - 4 高田派
- ◎ ご法主のお名前は何？
 - 1 常磐井鸞猷
 - 2 永六輔
 - 3 大谷光真
 - 4 高田好胤
- ◎ 私たちの門派はいくつある？
 - 1 五派
 - 2 七派
 - 3 八派
 - 4 十派
- ◎ 私たちの宗祖はだれ？
 - 1 道元
 - 2 空海
 - 3 親鸞
 - 4 一遍
- ◎ 私たちのお念仏は何？
 - 1 南無阿彌陀仏
 - 2 南無法蓮華經
 - 3 南無大師遍照金剛
- ◎ 合掌する時、必要な法具は何？
 - 1 お念珠
 - 2 木刀
 - 3 花
 - 4 お数珠
 - 5 お座布団

声明公演に行ってきました！

平成21年4月2日、東京国立劇場にて、開山聖人七百五十回遠忌報恩大法会の記念事業の一環として高田派特別公演 親鸞聖人讃嘆のつどい「報恩講式」が催されました。ご本山報恩講の第七夜に読まれる式文三段通読がメインになっており、約二時間程の公演でありました。いつもはご本山で聞かせて頂くお式文ですが、舞台を変え高田声明の伝統を表現され素晴らしいものでした！これからさらに磨きをかけ、御遠忌に向け邁進されるはずで、是非皆様と一緒にご本山へ参詣し、報恩感謝のお念仏を致しますよ！



ご法主様の入場です。いよいよ！

編集後記

死とは、生き延びる中で最後の教えだと思います。祖母の死は、生きることは如何なることか、死とは何か、など様々なことを尊い命を通して教えて下さいました。今ある命のあたり前でないこと、不思議さを感じて今後歩んで参りたいと思います。入は忘却の習いあり、今強く願うこともいつかは忘れてしまつかも知れません。しかし、この思いを持ち続け、感謝のお念仏を称えて参りたいと思います。
南无阿彌陀仏
衆徒 高山信雄

今後の予定

6月19日 午後1:30~	阿彌陀經に聞く 第29回法話会	久遠寺本堂
5月20日 午後1:30~	阿彌陀經に聞く 第28回法話会	久遠寺本堂

是非皆様お揃いでご参詣ください。
お知らせ
お経本は聖典でありますので、床に置かないで下さい。
随時、皆様の寺報記事を募集しています。ご連絡ください。